

第 35 回クラシックを楽しむ会

2016 年 8 月 21 日 (日) 18:00～ (2 時間 40 分、休憩除く)

ザルツブルク復活祭音楽祭 2015

カラヤンが創設したヨーロッパの春の一大フェスティバル。2015 年のハイライトは**ヴェリズモ・オペラ**の二大傑作。高い知名度の**ティーレマン**と**カウフマン**、新星の**モナスティルスカ**が話題をさらった。

会場等：ザルツブルク祝祭大劇場 (オーストリア)

2015 年 3 月 26、28 日、4 月 6 日 (2015 年のイースターは 4 月 5 日)

演奏：ドレスデン国立歌劇場管弦楽団および同合唱団

ザルツブルク・バッハ合唱団

ザルツブルク音楽祭および劇場児童合唱団

指揮：クリスティアン・ティーレマン

演出：フィリップ・シュテルツル

歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」(マスカーニ)

出演：リュドミラ・モナスティルスカ サントウツァ

ヨナス・カウフマン トウリッドウ

ステファニア・トツィスカ ルチア (トウリッドウの母)

アンブロジー・マエストリ アルフィオ

アンナリーザ・ストロッパ ローラ (アルフィオの妻)



トウリッドウ、決闘の申込みを受けたものの

美しい間奏曲が印象に残るオペラだが、内容は音楽とは裏腹で痴情の果ての殺人事件。原作者はイタリア・シチリア島の寒村で生まれたジョバンニ・ヴェルガ。ヴェルガは生家の近くで実際に起きた痴情に絡む殺人事件をもとに小説と戯曲を書いた。

「間奏曲」は名曲中の名曲。アリア「ママも知るとおり」、「母さん、あの酒は強いね」も有名。

歌劇「道化師」(レオンカヴァルロ)

出演：マリア・アグレスタ ネットダ/コロンビーナ

ヨナス・カウフマン カニオ/道化師

ディミトリ・プラタニアス トニオ/タデオ

タンセル・アクセイベク ペッペ/アルレッキーノ

アレッシオ・アルドゥイーニ シルヴィオ



怒りと悲しみに耐えて化粧するカニオ

イタリア南部の村に旅回り一座がやってくる。一座の座長が妻の浮気を知り、怒りと悲しみに震えながらも客を笑わせるため化粧をして舞台に上がる。舞台の上で道化役の座長が女優役の妻にコケにされて現実と芝居の区別がつかなくなり、妻と妻の浮気相手を刺し殺してしまう。

オペラ史上有名なアリア「衣装をつけろ」のほか、「間奏曲」もよく取り上げられる名曲。

第 36 回クラシックを楽しむ会 (予告)

タイトル：歌劇「カルメン」(ビゼー)再演

9 月 18 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

再演希望トップの人気オペラ。フランス南部オランジュ古代劇場 2004 年、モンズン (カルメン) とアラニーヤ (ホセ) の素晴らしい歌と演技をもう一度楽しみましょう。

10 月以降、「ナブッコ」、「ドン・ジョバンニ」、「トゥーランドット」など新演出の名作の他、これまで上映した人気演目の再演も予定。

歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」

【時と場所】

19世紀末のイタリア、シチリア島の寒村ヴィッツィーニ、復活祭の日

【主要人物】

サントウツァ (メゾソプラノ)	若い農民の女の子。トゥリッドウの女友達
トゥリッドウ (テノール)	若い農夫。兵役から戻り、母親ルチアの居酒屋を手伝っている
ルチア (アルト)	居酒屋の女主人。トゥリッドウの母親
アルフィオ (バリトン)	馬車屋。トゥリッドウの婚約者だったローラと結婚している
ローラ (メゾソプラノ)	アルフィオと結婚したがトゥリッドウと逢瀬を重ねる
村人 (混声合唱)	

【全1幕】シチリア島ヴィッツィーニ村、復活祭の日

トゥリッドウは美しいローラと結婚の約束をしていたが、彼の兵役中にローラは馬車屋のアルフィオと結婚してしまった。除隊して帰郷したトゥリッドウは、ローラを忘れようとサントウツァと恋仲になったが、ローラを忘れられず、アルフィオの目を盗んでローラと逢引を重ねていた。これを知ったサントウツァは怒りのあまりアルフィオに告げ口してしまう。アルフィオは激怒しサントウツァは後悔する。

[舞台には誰もいなくなり、静かに美しい間奏曲が流れる]

聖テレーザ教会のミサが終わり、男たちはトゥリッドウの母ルチアの居酒屋で乾杯する。アルフィオはトゥリッドウの勧めた杯を断る。二人は決闘を申し合わせ、アルフィオはいったん去る。トゥリッドウは酒に酔ったふりをしながら母に「もし自分が死んだらサントウツァを頼む」と歌う。トゥリッドウが酒場を出て行きしばらくすると「トゥリッドウが殺された」という女の悲鳴が響く。



ヴィッツィーニ村。実際に起きた殺人事件の舞台。正面がルチアの居酒屋、右が聖テレーザ教会。坂の上にサントウツァとローラの家が向かい合わせ。左の坂を下った先の荒野でトゥリッドウとアルフィオが決闘。トゥリッドウが命を落とす。なお、画面の少し手前、市庁舎広場に面した角に原作者ヴェルガの生家がある。(GoogleMaps)

補足.

カヴァレリア・ルスティカーナとは「田舎の騎士道」の意味である。

復活祭(イースター)はキリストの復活を祝うお祭り。春分の後の最初の満月の日の次の日曜日のため毎年、かわる。なお、イースター(英語)はゲルマン神話の「春の女神」が語源とも。

歌劇「道化師」(レオンカヴァーロ)

【時と場所】

1865年頃、南イタリア・カラブリア地方のモンタルト村、聖母被昇天祭(8月15日)の午後から夜まで

【主要人物】

カニオ (劇中では道化師)	旅回り一座の座長 (テノール)
ネッダ (同コロンビーナ)	女優でカニオの妻 (ソプラノ)
トニオ (同タッデーオ)	せむしの道化役者 (バリトン)
ペッペ (同アルレッキーノ)	色男役者 (テノール)
シルヴィオ	村の青年、ネッダと相思相愛の仲 (バリトン)
合唱	

【プロローグ】

トニオが登場。これから始まる芝居は絵空事ではない、作者が人生の断面を涙して作ったものだ、道化の衣装を着けていても皆様と同じ人間だ、と前口上を述べる。

【第1幕】

着飾った村人たちが聖母の被昇天祭を祝っている。座長カニオの旅回り一座がやってきて居酒屋に繰り出す。村人たちは教会の礼拝に向かい、残り残ったカニオの若い妻ネッダは自由な生活へのあこがれを歌う。せむしのトニオがネッダに言い寄るが、手ひどく鞭で打たれて復讐を誓って逃げ出す。入れ違いに村の青年シルヴィオが現れる。ネッダとシルヴィオは相思相愛の仲で、駆け落ちの相談を始める。トニオはその様子を目撃し、仕返しのためカニオを呼んでくる。ネッダがシルヴィオに「今夜からずっと、あたしはあんたのもの」と言うのを聞いてカニオは逆上。シルヴィオは逃げ出し、ネッダは情夫の名を拒む。騒ぎを聞きつけたペッペはカニオを鎮め芝居の仕度を促す。カニオは、道化役者の怒りも悲しみも隠して客を笑わせなければならぬ心情をアリア「衣装をつけろ」で歌う。

【第2幕】

村人たちが集まり一座の芝居が始まる。舞台の上、コロンビーナ(ネッダ)が恋人アルレッキーノ(ペッペ)を待ちわびている。下男タッデーオ(トニオ)が現れて言い寄るが、蹴り飛ばされて退場。コロンビーナとアルレッキーノが逢引を始める。道化師(カニオ)が戻ってきて、コロンビーナがアルレッキーノに「今夜から、あたしはあんたのもの」と言うのを聞く。それが先ほどの現実世界と同じ台詞であることに混乱、芝居と現実との見境がつかなくなる。カニオが「情夫の名を言え。おれはもう道化師じゃない」と叫ぶ迫真の演技に、村人は拍手喝采。カニオは逃げ出そうとするネッダを刺殺し、ネッダを助けようと舞台上に上がってきたシルヴィオも殺される。村人たちが大混乱の中、カニオは「喜劇はこれで終わり」とつぶやく。



南イタリアのモンタルト村は歌劇「道化師」の舞台である。台本作者で作曲者のレオンカヴァーロの名が付いた通りから広場を見る(GoogleMaps)

補足.

聖母被昇天祭は聖母マリアの昇天を祝う日(8月15日)。

歌劇のタイトル「**道化師**」はイタリア語で複数形の「パリアッチ」。単数形はパリアッチョ。役柄のパリアッチョとそれを演じる主人公自身をパリアッチョとあざ笑うことからタイトルを複数形にしたらしい。

出演者について

クリスティアン・ティーレマン(1959-)

ベルリン出身。ドイツの主要歌劇場、名門オーケストラの音楽監督、指揮者を務め、ウィーンフィル、ベルリンフィルに定期的に客演、ウィーン国立歌劇場、バイロイト音楽祭でも活躍している。



ヨナス・カウフマン(1969-)

ドイツ・ミュンヘン生まれ。21世紀の「キング・オブ・テノール」と称され、そのダークでロマンティックかつ強靱な歌声で今や世界中から引っ張りだこ。三大テノールの最も有力な後継者とされている。本公演では一晩にトゥリッドゥ役とカニオ役を歌い通したということで評判を呼んだ。



リュドミラ・モナステルスカ(デビューは1996)

ウクライナ・キエフ出身のソプラノ(リリコ・スピント)。2012年にはミラノ・スカラ座とMETでいずれもアイダ役でデビューしている。今回のサントウツァ役で大絶賛された。



ヴェリズモ・オペラについて

ヴェリズモは真実主義あるいは現実主義と訳され、19世紀末から20世紀初頭イタリア・リアリズム文芸運動のこと。文学だけでなく、演劇、オペラにも大きな影響を与えた。ヴェリズモの代表的な文学作品は、ジョヴァンニ・ヴェルガの短編小説「カヴァレリア・ルスティカーナ」で後に本人が戯曲化した。

マスカーニがこの戯曲をもとにした歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」を上演し大反響を呼んだことから、レオンカヴァッロも作曲家自身が台本を書き歌劇「道化師」を2年後に上演して大成功。今ではヴェリズモといえば文学よりこれらのオペラを指すことが多い。ヴェリズモ・オペラの特徴は、一般の人々の日常生活、残酷な暴力などの描写、音楽的には直接的な感情表現、重厚なオーケストレーションである。なお、ヴェリズモ・オペラ以前の「カルメン」、「トスカ」も同じ範疇の作品といえる。

ジョヴァンニ・ヴェルガ(1840-1922)

シチリア島東南部の山奥の寒村ヴィッツィーニに生まれた。フィレンツェ、ミラノに移って、このシチリア島の田舎の出来事を中心に短編集「田舎の生活」を出版した。「カヴァレリア・ルスティカーナ」はこの短編集の一篇で、生家のすぐ近くで実際に起きた事件を作品にしたもの。晩年はヴィッツィーニの生家に帰りそこで亡くなった。



ピエトロ・マスカーニ(1863-1945)

イタリア北部の港町リヴォルノで生まれた。オペラの作曲家、指揮者として多くの成功を収めた。近くのルッカ生まれの友人プッチーニ(1858-1922)の陰に隠れて過小評価されているがプッチーニとは作風が大きく異なっている。「カヴァレリア・ルスティカーナ」以外に「友人フリッツ」も評価が高い。晩年はムッソリーニに接近したため、イタリアが降伏した後に全財産を没収され寂しく生涯を閉じた。



補足。「カヴァレリア・ルスティカーナ」間奏曲にマッソーニが歌詞をつけた歌曲は「マスカーニのアヴェマリア」と呼ばれ、三大アヴェマリア(シューベルト、グノー、カッチーニ)に次ぐ名曲で多くの歌手に取り上げられている。

ルッジェーロ・レオンカヴァッロ(1857-1919)

ナポリ生まれ。オペラ、オペレッタの作品を多く残したが、「道化師」以外は現在上演されていない。その他、交響詩、多数の歌曲を残している。特に歌曲「朝の歌」(マッティナータ)はパヴァロッティなど多くの歌手が取り上げているイタリア歌曲中の名曲である。文才にも恵まれ台本作家でもある。「道化師」など自作のオペラの台本の他、プッチーニの出世作「マノン・レスコー」の脚本にも協力した。

補足。レオンカヴァッロは「道化師」の台本について、判事だった父親が扱った実在の事件をヒントにしたと主張していたが、現在ではフランスまたはスペインの作品の翻案との説が有力である。

